

第 22 回日本熱帯生態学会年次大会（横浜）  
講演要旨集

Proceedings of the 22<sup>nd</sup> Annual Meeting of  
the Japan Society of Tropical Ecology in Yokohama 2012

公開シンポジウム  
「熱帯における生物多様性と生態リスク」



(Near Moeyungyi Wetland Wildlife Sanctuary, Myanmar)

2012年6月15日～6月17日  
横浜国立大学 常盤台キャンパス

日本熱帯生態学会  
The Japan Society of Tropical Ecology

## ミャンマー・ナルギス被災地域で活動する NGO と相互啓発実践型地域研究の試み

安藤和雄<sup>1</sup>・キン レイ シュエ<sup>2</sup>

1 京都大学東南アジア研究所、2 イエジン農業大学(ミャンマー)

キーワード: ナルギス、PLA、実践型地域研究、NGO、ミャンマー

Mutual Learning Practice-oriented Area Studies with NGO working in Nargis Affected Area, Myanmar

\*Kazuo Ando<sup>1</sup> Khin Lay Swe<sup>2</sup>, 1Kyoto University, 2 Yezin Agricultural University(Myan

Key Words: Nargis, PLA, Practice-oriented Area Studies, NGO, Myanmar

**1. はじめに** 2008年5月にイラワジデルタに上陸したサイクロンのナルギス Nargis は死者14万人、2007年11月にバングラデシュのベンガルデルタを襲ったシドル Sidr の死者は5千人であった。この差の大きさに驚く。サイクロン常襲国であるバングラデシュでは国際援助によりサイクロンシェルターなどの防災対策が着々と進んだ。しかし、イラワジデルタでは過去50年間にナルギス規模の高潮の被害を受けておらず、防災対策が整っていなかったことが指摘されている(柴山ほか 2009)。こうした理由の他にバングラデシュとミャンマーの間で、サイクロンの防災対策に関する国際協力があつた形跡はない。私たちはこの点を残念に思っている。バングラデシュとミャンマーの政府間関係は不安定で連携がなかなか進まない。政府にかわり NGO や大学、研究所などが協働関係にあつたならば状況は変わっていただろう。私たちはこの教訓から共通の問題を抱える国の人々がお互いに学び合う協働研究としての相互啓発実践型地域研究を模索している。2012年1月にはベンガル湾沿岸のサイクロン常襲地域においてバングラデシュとミャンマーの NGO スタッフにより PLA (参加型学習と実践調査) を実施した(安藤 2012)。同年2月にはヤンゴンにおいて環境問題と開発に関する国際会議を開催し、イラワジデルタのナルギス被災地域で一部を除くワークショップ参加メンバーによって PLA を行った。本報告では、特にイラワジデルタでの PLA の結果を報告し、実践研究の展開方向について言及する。

**2. 地域の概要と調査方法** 2月13-14日にヤンゴンで開催したワークショップには、バングラデシュの NGO から2名、カンボジア、ラオス、タイ、インドネシア、ブータンの大学からそれぞれ1名、ミャンマーの NGO から2名と大学および研究所から5名、日本からは大学と研究所関係者7名が発表参加した。PLAは2月15-19日の間、ホストであるミャンマーの NGO・FREDA (Forest Resource Environment Development and Conservation Association) のボーガレー郡 (Bogalay Township) の活動地域でナルギス被災地と被災が少なかったマングローブ地帯の村落で実施した。

**3. 結果と考察** FREDA はイラワジデルタのほぼ南西端に位置するボーガレー郡でマングローブ植林を主な事業として実施してきた。ボーガレーの港から FREDA のフィールド事務所兼ゲストハウスまで船で川を下る。船から岸のサイクロン被災地の景観を観察する。FREDA のローカル・スタッフと地元の人にナルギスの被害についてたずねることができた。14万人が亡くなられたとはいえ、それ以外の住民は命をつないだのである。発表者の安藤はバングラデシュの NGO である DUS (Dwip Unnayon Songstha) の活動するベンガル湾に浮かぶハティア島にて、サイクロンの高潮に襲われた時の生存方法の話を聞いている。イラワジデルタの状況はどうだったのだろうか。ボーガレーではサイクロン被害を受けた家屋の立地は川からの近さによって3類型で分ることが分かった。第1類型は、支流や自然系水路の堤にたつユア・タン (Yuwa Tang) のまばらな家屋の集落、第2類型は、ココナツなどの生い茂る比較的定住の進んだ集落であるユア (Yuwa)、第3類型は、ユア・タンとユアとのほぼ中間で、水田の中に立つ出作り小屋とでも呼べるレ・テ (Le Te) である。調査地の河川には人工の堤防は認められず、河川に張り出すようにユア・タンの家々は建てられている。家の周囲には数本の木々が植えられている。木々もアメリカネムのココ (KoKo) が目立っていた。遠方からの眺めではユアは家屋が隠れるほどに屋敷地林が発達している。レ・テには木々はほとんど植えられていないが、粃を貯蔵する倉がある場合がある。倉は幾本の杭柱の高床となっていて、構造も高潮の水流や強風に耐えられるほど頑丈である。NGO のスタッフと地元の人々の話によれば、ユア・タンの家々は高潮に吞まれ、壊滅的な被害を受けた。レ・テでは頑丈な倉にしがみついて難を逃れた人もいたという。もっとも安全だったのはユアで、たとえ家屋が高潮で流されても木々にかまけて難を逃れたという。こうした結果から屋敷地林が高潮から人の命つなぐ最後の砦となっていたことが推察される。バングラデシュのハティア島などでの住民から聞き取り結果とも一致している。サイクロンの高潮の被害を軽減させていくためには、ユア・タンやレ・テへの屋敷地林が重要なキー・ポイントとなる。この点については、池、土塁、林が基本的な要素となっているバングラデシュの屋敷地文化の有効性が推測された。是非、ミャンマーやバングラデシュの NGO と協働して、「バングラデシュの屋敷地文化」の試験的導入を事業化してみたいと計画している。

(引用文献) 柴山知也・高木泰士・ヌン ヌウ・青木陽 2009 「サイクロン Nargis による高潮被害の調査『土木学会論文集 B2 (海岸工学)』 Vol. B2-65, No. 1, 376-1380.

安藤和雄 2012 「ミャンマーとバングラデシュの NGO によるサイクロン減災への連携実践の可能性」『熱帯農業研究』第5巻別号1、日本熱帯農業学会: 31-32.

第 22 回日本熱帯生態学会年次大会（横浜）

講演要旨集

発行日：2012 年 6 月 15 日

発 行：第 22 回日本熱帯生態学会横浜大会事務局（JASTE22 事務局）

〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2

横浜国立大学大学院環境情報研究院 持田研究室内

Tel: 045-339-3414

E-mail: [jaste22.yokohama@gmail.com](mailto:jaste22.yokohama@gmail.com)

年次大会実行委員長：持田幸良

年次大会事務局長：金子信博

大会事務局：小池文人，大野勝弘，若松伸彦，古川拓哉

印刷製本：土屋図形株式会社